

丹波の村落と神社祭祀

——ミヤノトウとカブをめぐる民俗構造論序説——

八 木 透

一 はじめに

丹波地域には、ミヤノトウ（宮の当）あるいはキョウノトウ（経の当）などとよばれる当屋祭祀が見られる^①。具体的には亀岡市とその北部の船井郡八木町、同園部町、同日吉町と、北桑田郡京北町、および兵庫県丹波の篠山市（旧篠山町）東部にその分布が広がっている。

ミヤノトウとは、一年間の神社祭祀の世話をする当役の者を指すが、年末あるいは年始に行われる当役の交替儀礼をも意味する。ミヤノトウは、村人が毎年交替で勤めることになっており、その順序は年齢もしくは氏子入りをした順に廻ることが通例とされている。ミヤノトウを勤めることは、村人として一生で一度のハレ舞台であり、また当該村落の構成員として生涯を全うするための重要な通過儀礼であるともいえる。なおミヤノトウを勤める資格に関しては村落によって種々の規範が見られる。すなわち氏子であればすべての村人が平等に勤めることになっている例もあれば、村人の中である特定の条件を満たす者のみにその権利が与えられている例もある。ここで考えねばならない問題は、丹波地域に特有のカブ（株）とミヤノトウとの関連についてである。周知のように、丹波にはカブと称するいわゆる同族集団が顕著であり、神社祭祀においても特定のカブによって営まれている例が多く見ら

れる。たとえば亀岡市内では、全体の約三〇%以上の神社で特定のカブによる祭祀が行われているといわれ、そのうちの約半数は、村落の氏神とは別に、カブ独自の祭祀対象を持つ^②。これらのことから、丹波地域の神社祭祀に同族集団としてのカブが非常に大きな影響を与えていることは確かである。しかしこれまで、ミヤノトウを中心とした神社祭祀はもちろん、丹波のカブ結合の実態に関しても、竹田聴洲の祖先崇拜と同族祭祀を中心とした研究を除けばほとんど調査が手つかずであり、ミヤノトウの分布とその内容、およびカブと神社祭祀の関連に関してはほとんど明らかにされていない。

本小論では、筆者がこれまでに調査の機会を得た船井郡日吉町天若地区および中地区と、亀岡市千代川町川関の事例を中心に、神社祭祀の一形態であるミヤノトウとカブ結合の関連について若干の分析を試みる。その際、当該地域の家と村落内集団の特質を考える上で非常に重要な意味を持つと考えられる、伊勢講の構成メンバーとカブおよびミヤノトウとの相関性についても言及する。その上で、丹波地域の村落構造の特質を抽出するための仮説を提示することを目的とする。もともと、京都府と兵庫県を含むわめて広域な丹波という地域の、特にカブと神社祭祀という、村落生活上もつとも普遍的な事例の構造的解釈を、ある特定地域の事例のみをもって論じるつもりはない。これまでほとんど未踏の分野でもあった本テーマについて、安易な普遍化はとうてい不可能であることは十分承知している。ただ未踏の領域であればこそ、基礎的な事例研究を積み上げてゆく作業が必要なのである。本小論執筆の意図は、近い将来に本テーマに関する総括的な分析と解釈を試みるための一助となることを願つてのことにはかならない。

二 日吉町天若・中地区の村落とミヤノトウ

(a) 調査対象地域の概要

日吉町天若地区とは、小茅・上世木・栗河・沢田・世木林・宮の六集落を、中地区とは中の村落を指す。この地域は日吉ダムの建設に伴って、全住民の移住が進められ、今日では大半の集落はダム湖の底に沈み、かつての景観はまったく失われてしまった。いわゆる「ダムに沈んだ村」である。日吉ダムは、一九六〇年代より地元住民と日吉町、京都府、建設省、水資源開発公団などの関係機関との間で賛否をめぐって論争が繰り返され、紆余曲折を経て、ようやく一九九八年に完成を見た。

当該地域は、近世期には小茅・上世木・栗河が上世木村、沢田・世木林が世木林村、宮、中がそれぞれ宮村と世木中村の四カ村に別れていたが、明治一九（一八八六）年に世木林村・宮村・上世木村が合併して天若村に、世木中村が中村となった。さらに、明治二二（一八八九）年の市町村制施行によって、中世木村・殿田村・木住村・生畑村とともに世木村として合併され、昭和三〇（一九五五）年に日吉町として合併した。以上の行政区画の史的変遷がそれぞれの村落間の結合にも影響を与えていると考えられる。すなわち氏子圈を見ると、当該地域には小雨若神社・天稚神社・八幡神社の三社があるが、小茅・上世木・栗河は小雨若神社、沢田・世木林・宮は天稚神社、中は八幡神社のそれぞれ氏子となっている。また、講組織その他の結合においても、同様の傾向がうかがえる。しかし、人々の日常的交際関係においては必ずしもこのような村落結合が普遍的規範となっているわけではない。その例として、栗河は氏子圈においては上世木と共通であるが、寺檀制においては沢田・中と同じ成就院の直檀となっており、また、親類以外の葬式があっても上世木には行かないが沢田へは行くという伝承も聞かれる。

当該地域の村制の特徴としては、第一に、本小論の主題であるミヤノトウの制度が各集落ごとに見られることが



【地図1】日吉ダム建設以前の天若・中地区
(国土地理院2万5千分の1地形図「殿田」より)



【地図2】現在の日吉町
(国土地理院2万5千分の1地形図「殿田」より)

あげられよう。各村落では、ミヤノトウを勤めることが正式な村落構成員になるための重要な条件とされていた。第二に、各村落にはいくつかの講集団が存在するが、その中でも特に伊勢講に加入することが村人たちにとって重要な意味を持つという特色が見られる。当該地域の伊勢講は、イセコウヤマ（伊勢講山）等と称する講の財産を所有していることも関連し、信仰的講集団としてよりは、むしろ村落構成員を規定する社会集団としての性格をより濃厚に有していると思われる。すなわち、伊勢講の加入に関しては一定の規制が見られ、ミヤノトウと同様に伊勢講に加入することが正式な村落構成員になるための重要な条件とされている例が多い。第三に、各村落には、カブと称する集団が存在し、様々な面において人々の社会生活を規定していることがあげられる。カブは、多い場合は七戸、少ない場合は二戸の同姓の家によって構成され、それぞれ本家をオモヤ、分家をインキョと呼びあう一種の同族集団として捉えられるものである。

なお以下に記述する天若・中地区の事例は、一九八〇年代後半に行われた水没地域の文化財総合調査によるデータをもとに、『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』に掲載された拙稿「社会生活と村落組織」に加筆・修正を加えたものである。⁴ 天若・中地区の民俗に関する詳細は『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』を参照されたい。

(b) 神社祭祀とミヤノトウ

当該地域には前述のように、上世木に小雨若神社、世木林に天稚神社、中に八幡神社がある。この中で、天稚神社と八幡神社にはミヤノトウが見られる。天稚神社では沢田と世木林で一人、宮で一人のミヤノトウと呼ばれる、神社の一年間の行事を司る世話役を出している。ミヤノトウは、それぞれ年長者より順次年の若い者に廻る形態がとられ、毎年一月一五日に交替する。ミヤノトウは村人にとって一生一度の大役ではあるが、実際には、すべて氏子総代の命令にしたがって使い走りからその他の種々の雑用一切を行うことが要求され、その意味においては一年

間非常に多忙な日々を送らねばならなかった。毎年一月一日に天稚神社の社務所でミヤノトウの当渡しの儀礼が行われる。この時はすべての氏子が集まるわけではなく、沢田八戸と世木林二戸という特定の家の戸主だけが天稚神社に出向き、御供を作つて神前に供え、この場で新しいミヤノトウが申し渡される。なおこの二九戸の家は、後述する伊勢講の構成家でもあり、沢田と世木林では伊勢講に加入する家々でミヤノトウも廻していたことがわかる。当渡しでは年齢の差がことさら強調され、席順からあいさつまで、すべて年齢の順に廻る。新しいミヤノトウはこの時に「開かずの箱」というミヤノトウ持ち廻りの箱を預かり、これを自家の神棚に置いて一年間大切に祀る。「開かずの箱」には近世末から明治期にかけてのミヤノトウ関係の文書が入っている。青盛透の調査によれば、ミヤノトウは本来世木山宝珠院という神宮寺に属する行事であり、春と夏の年に二度当役を出していたが、夏の当役は早くに廃れ、春の当役のみが残つて近年までミヤノトウの行事として伝えられてきたといふ⁵⁾。

当渡しの日には、ミヤノトウになった者は自家で親類を招いて盛大な宴を催す。この際、本人とその同カブのオモヤの主人が、皆に丁重なあいさつをすることがしきたりとなっていた。なおミヤノトウになつて以後、もし身内に不幸があれば、すぐに次の者と交替して、翌年また一月一日から勤め直さねばならなかったという。また、宮でも沢田や世木林と同様に一月一日に新しいミヤノトウが申し渡される。宮でも以前は天稚神社でその儀式を行っていたというが、調査時点では村内の会議所で行われていた。昔はミヤノトウになる者は、紋付羽織袴姿で出向かなければならず、その席では、年長の者の言いつけをすべて聞かねばならないという非常に厳しいものであったという。またその後自家へ全戸主を招き、婚礼にも匹敵するような本膳を出していたが、近年は、その代わりに村へ二万円から三万円程度のお金を渡すようになった。

なお、上世木の小雨若神社は天稚神社の分社であり、ここにも明治の中頃までは同様のミヤノトウがあつたようであるが、以後行われなくなつたという。また中でも、年齢順に一月一日からミヤノトウを二年間勤めてい

たというが、詳細については聞くことができなかった。

(c) 村入りと村落構成員

楽河では非常に興味深い村入りの儀礼が見られた。楽河ではもともと楽河寺の世話役であるネンバン（年番）という役があり、これは一年交替で各戸の年寄りの年齢順に家を単位として廻ることになっていたが、ある年に跡取りの長男で数え一七歳になる者があれば、特別にその者がその年のネンバンを勤めるという慣習があった。この場合は正月五日に全戸主を自家に招き、本人とその父親が皆に酒をふるまう。この儀礼をイレトウとよんでいる。もし同年齢の者があれば、生まれ月の早い方が先に勤め、翌年もう一人が勤めることになっていた。この儀礼を経てはじめて若者は正式に村の構成員として認められた。ネンバンは各戸の年寄りが死亡するまでその者の名で村内に公開されることになっており、若い者は一七歳でイレトウを行う時のみ、自分の名が公に出る。さらに数え一七歳になった者は、翌日の一月六日に行われる山の口の当番も勤めねばならず、この場合は一月五日には精進料理を、翌日の六日には魚を含めた料理を全戸に振る舞わねばならなかったという。すなわち一七歳の村入りの際には、一月五日と六日の二日間全戸を招いて料理を振る舞わねばならなかったのである。なお他所から養子に来た者や新しくインキョとして家を構えた場合、その年にイレトウを勤めたという。すなわち、その者の年齢がいくつであつても、ネンバンをはじめて勤めた年に数え一七歳になったものとみなされるわけで、この原理は生涯適用された。

他村落では楽河のような明確な村入りの儀礼は見られないが、たとえば沢田では、観音堂の管理をするネンバンとよばれる役があり、これは家順に廻ることになっており、以前は一月五日から一年間勤めていたという。他所から養子に来た者は、その家がネンバンに当たった年の山の口の日に正式に村人たちに紹介され、それによって村の構成員として承認された。ただし他所者は、ネンバンになることは認められても、決してミヤノトウにはなれなかつ

たという。また、もしネンバンとミヤノトウが重なった場合は、ミヤノトウを優先させ、ナンバンは次の者と替わってもらったという。

宮では、新しくインキョした者は一月一五日のミヤノトウの披露の際に、村人たちに酒を振る舞い、皆の前であいさつをする慣習があり、これが村入りの儀式とされている。その他の村落でもかつては楽河と同様の村入りの儀礼があったというが、早くに消滅してしまったものと思われる。

(d) カブと伊勢講

当該地域には各村落ごとにカブと称する同族集団が存在する。カブは多い場合は七戸、少ない場合は二戸の家で構成された先祖を同じくすると認識されている家々の集まりである。カブ内では多くの場合その系譜関係が明確にされており、本家をオモヤ、分家をインキョとよんでいる。同じカブに属する家は、原則として同じ姓を名乗るが、養子に行ったりした関係で別の姓を名乗る家が含まれている例も少数ではあるが見られた。カブ内でのつきあいは、かつては正月と盆にはインキョの者はオモヤへあいさつにゆく風習があったというが、近年は一般のシンルイと区別がなくなってきたという。しかしそれでも婚礼と葬式には必ず招待しあい、葬式の際の穴掘りをはじめとする一切の手伝い、婚礼の際の親族を代表としてのあいさつや嫁迎え等において、親密な関係を維持している。

楽河では、インキョで葬式があると、カブのオモヤの者が必ずクヤミウケと称して会葬者たちが持参した香典を受け取りあいさつをする役を務めたという。また婚礼には必ず同じカブの家をすべて招待する。沢田には二つのカブがあるが、一方のカブ内で葬式があると、他方のカブのオモヤがその葬式の葬儀委員長を務めることになっていったという。かつてはカブ全体で強固なまとまりを持っていたものと思われるが、近年は直接のオモヤ・インキョ関係を特に重視し、同じカブ内でも比較的遠い関係にある家と近い関係にある家とが区別されてきているようである。

表1 上世木の村落組織一覧

家番号	村 組	カ プ	伊勢講
01	○…北の町	▲	△
02	△…イカダの町		×
03	□…中の町		
04	×	▲	△
05	○…スエヨシ講	■	○
06	△…②の講	▲	×
07	□…③の講		○
08	×	●	□
09	△…④の講	■	○
10	(②③④は便宜上の数字でスエヨシ講以外は特別な名称はない)	●	□
11		□	×
12		▲	△
13		×	×
14	○…V 1 株(2 戸)	●	□
15	△…V 2 株(4 戸)	●	□
16	□…V 3 株(2 戸)	●	□
17	×		△
18	☆…V 5 株(3 戸)	×	□
19	●…Y 01 株(5 戸)		△
20	▲…Y 02 株(4 戸)	△	×
21	■…Y 03 株(2 戸)	☆	○
22		△	△
23			△
24		×	□
25		☆	○
26		☆	○
27		○	
28			○
29			△
30		△	×
31		□	×
32			△
33		△	△
34		○	

拙稿「社会生活と村落組織」
 (『日吉ダム水没地区文化財
 調査報告書』所収) より

例えば婚礼に関しても、直接のオモヤ・インキョ関係の家は招待しあうが、そうでない家はたとえ同じカブであっても招待しないという話も聞いた。このようなカブ内でも特に親密な関係にある家を、宮ではオモカブとよんでいる。

新たにインキョを出すことは、かつては容易なことではなく、オモヤにそれ相当の力があるか、あるいは村内で

絶家した古い家をもろうかのどちらかの例が多かった。分家に際してオモヤは山林や田地を分け与え、当面の生活を援助したというが、その量はさほど多いものではなかったようである。分家した最初の頃は、婚礼などの時、オモヤにその費用の半分ほどは出してもらったという話もあり、インキョの生活は楽ではなかった。また、宮ではインキョは何年かの年を経なければ後述する伊勢講にも加入できず、せめて一代の間は神社の雑用や村落の協同作業を無償で行わなければ天稚神社の氏子にもなれなかったという。世木林では新しいインキョの家で、調査時点でまだ天稚神社の氏子になっていない者もあった。氏子になれないということは当然ミヤノトウになる資格もなく、その意味で新しいインキョは、ある一定の年数を経るまで一人前の村落構成員としては認められなかったことがわかる。

また、カブの紐帯を示す例として、コバカとよばれる詣り墓を同じくすることがあげられる。当該地区の墓制はいわゆる両墓制であり、ラントウあるいはミバカとよばれる埋葬墓以外にコバカとよぶ詣り墓が存在する。宮ではミバカは一ヶ所であるがコバカは四ヶ所あり、家々によつてその場所が異なる。宮の七つのカブでは一例を除いてそれぞれみな同じコバカを利用しており、カブとコバカの一致が見られる。

ところで当該地域の村落では、どこでも伊勢講が村落内において最も重要な講集団として近年まで機能していたとえば上世木では、基本的にはカブを単位とした四つの伊勢講が存在した。その中のひとつは「末吉講」という名称でよばれているが、他はこのような特別な名称はない。個々の伊勢講はそれぞれ別個にヤドを決めて、当番制で廻している。近年は年に一度一月一六日に集まっているが、かつてはこの他に十月十六日にも集まっていたという。ヤドに当たった家は講員全員に本膳を振る舞う。ヤドの家は講の共有物を入れた「講箱」を預かることになっており、これは次のヤドの家が取りに来るまで自家に置いておく。もしヤドの家で不幸があれば、早急にこの箱を次のヤドの家へ渡さねばならなかったという。各伊勢講は伊勢講山とよばれる共有の雑木林を持っている。講員が

表2 沢田・世木材の村落組織一覧

		家番号	村 組	カ プ	伊勢講	備 考
村組	○…北の町	01	○	○	●	
	△…世木材下組	02	○	○	●	
	□…世木材上組	03	○	△	○	
カプ	沢 田	04	○			
		05	○	△	○	
	世木材	06	○	△	○	
		08	○	○	●	
		09	○	○	●	
		10	○			
		11	△	×	○	
		12	△	×	○	
		13	△	●	○	
		14	△	□	●	
伊勢講	○…西講	15	△	□	●	
		16	△	●	○	
	●…東講	17	△	×		
		18	△			
	○…西講	19	△	□	●	
		20	△	☆	●	
	●…東講	21	△	●	○	
		22	△	●	○	
	○…西講	23	□	□	●	
		24	□	☆	●	
	●…東講	25	□	×	○	
		26	□	□	●	
	○…西講	27	□	□	●	
		28	□	□	●	
	●…東講	29	□	□	●	
		30	□	□	●	
	○…西講	31	□	☆	●	
		32	□			
	●…東講	33	□	×	○	
		34	□			
	○…西講	35	□	○	●	もと沢田に在住
		36	□			
	●…東講	37	△	×	○	

拙稿「社会生活と村落組織」
 (『日吉ダム水没地区文化財
 調査報告書』所収)より

全員揃った場で入札を行なって講員のひとりが伊勢講山の雑木を薪として買取り、そのお金が講の財産となった。このお金は年に一度の伊勢神宮への代参の費用に当てていたという。このことも関連して、上世木の伊勢講はアトトリ以外は加入することが許されず、その意味において講員の移動は皆無に近かったという。なお楽河は全戸数が九戸という関係上、全戸で一つの村組を構成し、かつ伊勢講も全戸加入であった。

沢田は全戸数八戸のため、村組はひとつであるが、伊勢講は世木林と共通の集団を形成している。すなわち西講、東講のふたつの伊勢講があり、沢田の湯浅カブの三戸は西講に、吉田カブの五戸は東講に加入している。世木林では、吉田カブの四戸と湯浅カブの五戸が西講に、別の湯浅カブの九戸と井尻カブの三戸が東講に加入している。このふたつの伊勢講とともに伊勢講山を持つており、かつては薪炭を出していたというが、近年は杉や桧の植林をしてその材木を集落内の者に売却していたという。この他に集落所有の共有林もあり、それらの権利は伊勢講に加入している二一戸のみが持つていたという。ただし、集落所有の共有林に関しては、新しく分家した者は十年間無償で山仕事を手伝えれば権利を得る事ができたという。沢田と世木林では、伊勢講に加入していることが村の正規の構成員である証とされ、前述のように、ミヤノトウも沢田八戸、世木林二一戸の伊勢講のメンバーだけで行われていた。かつては最初に東西どちらかの伊勢講に加入し、講のメンバー全員の合意のもとに、ミヤノトウの組織に参入したという。このように、伊勢講の構成員になることが、村内における様々な権利を得るための基本条件とされていたのである。

宮には戦前まではふたつの伊勢講があつたという。宮の伊勢講は上と下の二つの村組と一致しており、その他の講集団もすべて村組を単位として構成されている。戦前の伊勢講は上、下ごとに毎月一日に、一回ごとに交替するヤドの家に講員が弁当を持参して集まっていたという。宮の伊勢講には共有林はなかった。しかし新しく分家した者は伊勢講には加入できないといい、やはり何らかの加入規制があつたものと思われる。

表3 宮の村落組織一覧

家番号	村組	カブ	伊勢講	高名の家	コバカ	共有林を有するクミの一例
01	○		○		□	
02	○	×	○		□	
03	○		○			
04	○	○	○		○	
05	○	△	○	○	□	
06	○	×	○		□	
07	○		○	○	●	
08	○	☆	○	○	△	○
09	○	▲	○		○	
10	○	○	○		○	○
11	○	△	○	○	□	○
12	○	☆	○	○	△	○
13	△		△		△	
14	△	▲	△		○	
15	△	□	△		○	
16	△	●	△		○	
17	△	●	△		△	
18	△	□	△		○	○
19	△		△		○	
20	△		△		○	
21	△	□	△		○	
22	△	▲	△		○	
23	○	○	○		○	○
24	△		△	○	○	

村組 { ○…下組
△…上組

カブ { ○…Y01株(3戸)
△…Y02株(2戸)
□…Y03株(3戸)
×…Y04株(2戸)
☆…Y05株(2戸)
●…○ 株(2戸)
▲…V 株(3戸)

伊勢講 { ○…下の伊勢講
△…上の伊勢講

コバカ { ○…上のコバカ
△…中のコバカ
□…下のコバカ
●…無名のコバカ

拙稿「社会生活と村落組織」
(『日吉ダム水没地区文化財
調査報告書』所収)より

なお、中には十人組、十五人組というふたつの伊勢講があり、それぞれ別個に集会を持っていたという。この二つの伊勢講は村組ともカブとも一致せず、独自の集団を形成していたという。

(e) 小括

以上、日吉町天若・中地区のミヤノトウ・カブ・伊勢講を中心とした村落組織について述べてきた。ここで当該地域の村落の構造的特質について若干まとめておきたい。

当該地域におけるミヤノトウは、村人たちにとって一生に一度のハレの勤めとして意識されていた。一年間身内に全く不幸がなく、ミヤノトウを勤め上げ

ることができる確率はそう高くはなく、半年以上勤めてもその後不幸があれば、また翌年一からやり直さねばならず、宮では不幸が続いて三度やり直したという例もあった。その意味においてはミヤノトウを受けた年は、人々にとって一生で最も緊張を強いられる一年であったようである。

ところで、当該村落の村人たちにとって、村入りを済ませた者とそうでない者、さらにミヤノトウを勤めた者とそうでない者とは様々な面において明確に区別されている。また楽河のネンバンが各家の男子の最年長者の名で公開され、さらにその年齢がイレトウをした年を基準として生涯数えられるということより、当該地域における村人の年齢に対する認識が、実質の年齢よりいわば「村人としての年齢」を重視していることがわかる。その意味において、イレトウに代表される村入りの儀礼を経ることが村落構成員になるための第一次の通過儀礼であり、ミヤノトウを勤めることが第二次の通過儀礼とでもいうべき性格を有していたといえる。またこの二つの通過儀礼は、質的に異なるものと考えられる。たとえば沢田・世木林では他所から移り住んだ者や、村で生まれても次男以下の者は、たとえ独立しても決してミヤノトウにはなれなかった。すなわち他所者や次男以下の者は、村入りは許可されてもミヤノトウを勤めることは生涯許されなかったのである。また、ミヤノトウを勤める権利の有無を個人ではなく、「家筋」という視点から考えてみると、伊勢講に加入しているか否かが重要な条件とされていた。そして伊勢講の構成員を規定する基本的単位はカブであったと考えられる。

当該地域の各村落は、伊勢講を中心とした講組結合的要素と、カブを中心とした同族結合的要素が複雑に絡みあっている。村人たちの社会生活を規定する要因として両者を比較した場合、調査時点では、カブ結合に比べて伊勢講による結合の方がより重要視されていたように思われる。この現象について筆者は、かつてのある時期に、カブ結合の機能がそのまま伊勢講という講集団の結合へ移行したためではないかと考えている。すなわち同族としてのカブ結合の必要性が薄れ、その結果カブ結合は弛緩して分散、離合を繰り返すようになり、カブは小規模化しながら

ら形骸的には残ったが、実質的な家結合の原理は伊勢講という講集団に受け継がれてきたのではないだろうか。なおこの問題については、次章の亀岡市の事例を含めて後に詳述したい。

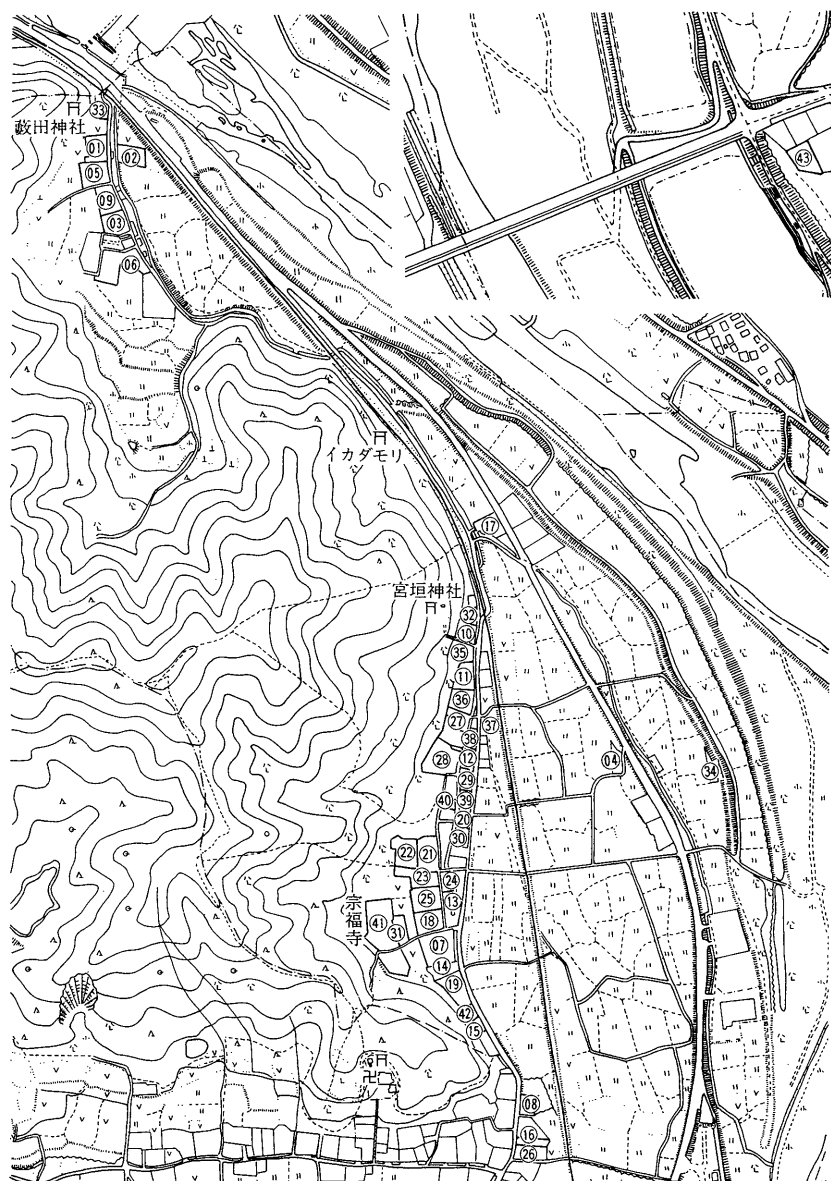
三 亀岡市川関の村落とミヤノトウ

(a) 調査対象地域の概要

本章では亀岡市千代川町川関の事例を中心として、神社祭祀とカブおよび講結合の構造について考察する。川関は亀岡市の最北端に位置し、旧山陰道に沿って南北に細長く広がる集落である。北は船井郡八木町に、南は千代川町千原と接し、集落のすぐ東側を山陰本線が走る。集落の西側は山が覆い、また鉄道の東側に田が開けており、そのすぐ脇を大堰川が流れている。集落は上と下に分かれ、上川関は新田であるといわれている。『桑下漫録』によれば天保年間には戸数が四〇戸^⑥、また明治二一（一八八八）年には五四戸^⑦、現在は四三戸と、明治期の若干の増加を除けば人口変動が比較的少ない村落である。

現在川関の四三戸の中で、ごく少数の例外を除けばすべて八木姓で、現在の川関は完全な同姓村落となっている。家々は数戸ごとにカブ（カブウチともいう）を構成している。川関のカブは、本家・分家関係に基づくといわれるが、必ずしも系譜が明確に認識されているわけではなく、カブ内の家々の関係は複雑である。しかしカブは古くから暮らしの様々な面において、強い紐帯で結ばれてきた。今日でもカブの結びつきは強く、村落生活の基本的な単位となっている。

川関には村の氏神として宮垣神社が祀られており、ミヤノトウとキョウノトウとよばれる行事が行われている。毎年一月三日に行なわれるミヤノトウは、一二才か一三才になる男子が年齢順に二人ずつ神社の当役を勤めるもので、これは一種の成人儀礼に相当する行事でもある。またミヤノトウを経験しやがて家の戸主になると、年齢順に



【地図3】川関家屋配置図

拙稿「川と宮座に生きる村—川関民俗誌」（『新修亀岡市史：資料編第五巻』所収）より

キョウノトウとよばれる当役が廻ってくる。キョウノトウを勤めると、やがてミヤトシヨリ（宮年寄）を勤めることになる。宮年寄はいわゆる神社祭祀をめぐる最高責任者で、かつてはこの役を勤めることは名譽なことであったという。このように、川関に住む男性は、ミヤノトウ、キョウノトウ、宮年寄を順次経験することによって、村人としての生涯を全うしてゆくのである。

なお以下に記述する事例は、亀岡市史編纂事業の一環として、過去数年の間に筆者が調査した資料をもとに、一九九八年に刊行された『新修亀岡市史資料編・第五巻』に収録の拙稿「川と宮座に生きる村―川関民俗誌―」から抜粋して加筆・修正を加えたものである。⁽⁸⁾ 亀岡地域の民俗の概要および川関の民俗に関する詳細は、同書および『新修亀岡市史資料編・第四巻』を参照されたい。⁽⁹⁾

(b) 川関のミヤノトウとキョウノトウ

現在、宮垣神社では一月三日にミヤノトウが行われる。これは一二才か一三才になる男子が年齢順に二人ずつ神社の当役を勤めるもので、かつてはこれを済ますと拝殿に上る資格が得られたという。これは成人儀礼であるとともに、一種の宮座入りに相当する行事であり、かつては八木姓の者にだけその権利が与えられていた。なお川関のミヤノトウには、前章で示した日吉町のミヤノトウのような、具体的な仕事や禁忌伝承は見られず、いうならば名ばかりの当役である。ただかつては、ミヤノトウを勤める時には羽織りを着て村中を「ミヤノトウを勤めさせてもらいます」といいながらあいさつをして回ったという。また、一月一日にはキョウノトウが行われる。ミヤノトウの経験者で家の戸主になると、だいたい五〇才前後に、年齢順にキョウノトウとよばれる当役を勤める。これは二人一組となり、その年の当役をホンバンといい、翌年の者をアイトウという。この二人にも決まった役割が課せられるわけではないが、川関の住人として生涯を全うするためには、いつかは必ず勤めなければならない役であり、

また次に廻ってくる宮年寄になる資格を得るための条件とされていた。ゆえに昭和一〇年代頃までは、キョウノトウを勤めた者は自家に全戸の戸主を招いて本膳でもてなしたという。キョウノトウを勤めると、やがて宮年寄を勤めることになる。宮年寄は年齢順に三人が一組となり、初年目の者はアイトウあるいはミナライ、二年目の者をリンバンあるいはホンバン、三年目の者をトシヨリとよぶ。このうちすべての仕事はリンバンが中心となり、他の二名はその補佐役を勤める。このように現在では宮年寄は三年任期と決められているが、後に述べる昭和三七年の規約改正以前は、後任の宮年寄になる者がいない場合は、六〇才まで何年でも勤めなければならなかった。ゆえに長い場合は、一〇年以上も宮年寄を勤めた者もいたという。宮年寄の仕事は、毎月一日の月次祭や例祭の供物の準備から、境内の掃除、注連縄作りなど神社に関するすべての仕事を担う。かつては、宮年寄は村内で大きな権限を有していたようで、それだけにこの役を勤めることは大変名誉なことであったという。このように、ミヤノトウをはじめとして、やがてキョウノトウを勤め、さらに宮年寄になるというように、世代を重ねるごとに村人としての役割を順次勤め上げてゆき、六〇才を契機として一切の公的な役割から免除されるのである。神社の当役を勤め上げてゆくことが、村人の一生を象徴的に示しているといえよう。

(c) 神社祭祀の構造と変遷

宮垣神社をめぐる祭祀とその構造は、これまでに何度か大きな変革が行なわれている。

現在宮年寄が廻り持ちで所持している「宮様書物講帳箱」には「文化元年甲子春（一八〇四年）と記され、その中に、文化三年（一八〇六年）に書かれたと思われる、宮垣神社の宮座の「規録帳」が残されている。¹⁰そこには当時の宮座の様子や現在では見られない行事も多く記載されている。この史料をもとに、川関の神社祭祀の変容過程を探ってみたいと思う。

「規録帳」の冒頭には「丹波国桑田郡川関村 宮座八木惣大夫」と記され、宮垣神社の宮座を「八木惣大夫」と称しており、まさに八木一族の宮座であつたことがわかる。また宮年寄に関しては次のような記載がある。

一、宮年寄ハ、宮座内之内六十一ニ近き人三人年寄役を相勤也、六十一歳之冬切ニ役を次江譲り、隠居する事古例也、尤三人之内年番持ニ行事相勤候事ゆへ、宮座之内ハ、老若ニ不依、不行跡成儀ハ、急度可相慎事、專一之心得也

これから、当時から神社の世話役として三人の宮年寄が置かれ、その役は数えの六一才の冬をもつて次の者に譲つて隠居することが慣例とされていたことがわかる。また続いて「規録帳」には、「歳内行事」として、一年間の神社の行事と、それぞれの行事の供物や飾り付けの仕方、接待の方法など、きわめて詳細な手引きが記されている。その中に「二月朔日より毎月朔日常例撮幣勤候也」とあり、毎月一日に「撮幣」（サツペイ）という行事が行なわれていたことがわかる。

一、撮幣ハ年寄講より初十三人出勤、中老十三人勤、若衆講ハ右次第二毎月朔日両社へ御膳を備へ、講中社参之上、当番方へ参会致なり

このように、当時は宮座内に「年寄講」、「中老」、「若衆講」という年齢に応じた組織が存在し、それぞれが神社へ供物を持参して参拝していたことがうかがえる。このサツペイという行事は、今日でも村の古老の伝承として残っており、戦前までは毎月朔日にキョウノトウを勤める前の年齢の者から一五人が神社へ集まり、祭りを行なつて

いたという。おそらく年寄講、中老などという年齢による集団が簡素化され、全体から一五人の者が代表して祭祀を行なっていたのであろう。

次にミヤノトウとキョウノトウについて考えてみたい。古くは旧暦九月一六日に重要な神事が行なわれていたようで、この時にミヤノトウの行事も行なわれていた。

一、九月十六日御神事前日当番兄方へ同苗中寄拵を手傳致入事

(中略)

一、上座より大老年順々ニ座席之事、早々当番式人者勿論、両親共御挨拶可有之候事

(中略)

右三献無滞相廻り候得者、大老衆二人より当番二人江御祝儀之盃を指、此盃を請納候而、又明年之当人江兄方・弟方共兩人江指也(後略)

この「当番二人」あるいは「兄方・弟方」がミヤノトウを指しているものと考えられる。ここでは年齢が明確ではないが、古老の伝承から、おそらく一三才前後の時期に、宮座入りの行事であるミヤノトウが行なわれていたであろう。またその際には二人が当役を勤め、誕生日の順に兄と弟と決め、この序列は生涯続いたといわれている。またミヤノトウを勤める際にも、相応のお金を宮座へ納め、かつ村中に挨拶して廻らねばならなかったという。一方キョウノトウに関しては、次のように記されている。

一、正月十日 経の党

一、神前二十六善神奉掛

御備もの 燈明 くわし

洗米 御酒

社僧御案内、水桶・敷物持参、当番は勿論、前年之人加役ニ而終日相勤也、御経相済次第、明年勤候人本尊を御迎ニ上ル也、般若之御礼ハ則日村中へ弘事も

このようにキョウノトウは、當時は一月一〇日に行なわれており、またこの時には神前に「十六善神」の掛軸を掛け、社僧すなわち僧侶が来て大般若経の転読を行なっていたようである。これからもわかるように、キョウノトウの「経」は大般若経を指し、本来は仏式にて行なわれていた行事であつた。また「経銀として、当番前年之冬七匁、当番相勤候冬三匁、都合拾匁出ス」とあり、キョウノトウを勤めるには、計銀拾匁の出費が必要であつたことがわかる。ところで、ここに登場する「十六善神」の掛軸に関して、次のような伝承がある。それは、キョウノトウはかつてはミヤノトウとともに、八木一族だけで行なわれていたが、村人が精進を守らないために災いが相次ぎ、それを契機にそれまで当屋で回り持ちであつた「十六善神」の掛軸を川関の檀那寺である臨済宗妙心寺派の宗福寺が預つたというものである。今日でもこの掛軸は宗福寺にあり、正月の三カ日だけ本堂に掛けて祀られている。「規録帳」にも「十六善神 快傳司筆 一幅 宮座第一之宝物 当番預り」と記されており、近世には「十六善神」の掛軸は宮座の宝物とされ、当屋の回り持ちであつたことがわかる。

ところで、川関の隣に位置する千代川町千原では、今日でも永田姓の者の祭りとしてキョウノトウの行事が続けられている。千原では一月一四日か一五日に四つの永田カブが合同で、輪番制で当屋を廻し、十六善神の掛軸を掛けて会食をしている。このようにキョウノトウは、本来は宮垣神社の祭祀とは別の同族祭祀の一形態であり、それ

は基本的には神仏習合の形態で行なわれるべきものであったことがわかる。川関でも、キョウノトウはもととは八木一族中の祭祀であり、先祖を祀るための行事であつたものが、やがて宮垣神社を村全体の氏神とし、八木一族の同族祭祀を氏神祭祀の中に組み込んでいったのではないかと考えられる。

このような祭祀の形態が近世より戦後まで継続されてきた。それが昭和三〇年代に第二の大きな変革を遂げることになる。すなわち宮年寄持廻りの文書の中に、「神社記録」と称する文書があり、昭和三二年（一九五七年）から昭和三九年（一九六四年）までの変革の様子が具体的に記されている。⁽¹⁾それによると、まず昭和三二年一月一日の「宮座評議会」で、第一に戦争により途絶えていたミヤノトウを復活すること、それを毎年一月三日に行なうこと、ミヤノトウを勤める者は金一封を奉獻すること、ミヤノトウを勤める者が各戸へ挨拶廻りをするこゝや、兄と弟を決めることを廃止すると記されている。また第二に、キョウノトウも復活すること、それを一月一日に行なうこと、キョウノトウを勤める者は酒一升と肴を奉獻し、氏人に振る舞うことを定め、またその他に宮年寄の該当者でも、慢性疾患などのやむを得ない場合には、宮座一同の評議によつて免除する旨が記されている。この改正を受けて、翌昭和三三年（一九五八年）の一月一日にはキョウノトウが行なわれ、次いで一月三日には、大正一四年（一九二五年）から昭和十一年（一九三六年）までに生まれた、計二五名の者が一度にミヤノトウを勤めている。その後昭和三七年（一九六二年）三月一〇日に宮年寄・区長・株総代による協議会を開き、また同年十二月九日に宮座總會を開いて再び大きな規約改正を行なっている。それは今日の川関の神社祭祀を考える上で重要な内容を含むと考えられるので、次に全文を掲げる。

評議決定事項

一、氏子及宮座加入の件

往古より宮垣神社は川関在住の八木氏一統を氏子とし、同苗相寄り宮座を組織し、一切の神事を遂行し併せて神社を維持し来りしが、示今加入希望申出の者は姓の如何を問はず八木氏同様に氏子加入及宮座入を認むることとする。

1、川関在住の氏子は同時に宮座入したるものと認め座入を共に拒むことは出来ない。但し社規に抛り座外を命じられたる者は此の限りにあらず。

2、氏子、座員は定規慣行により其の責務を果たさなければならない。

3、新規加入申出ありたる時は宮座中評議の上決定する。

4、新規加入に際しては、冥加金として玄米一石相當額を納付しなければならない。

但し分家加入の際は従前の例に依る。

5、氏子、座員にして他市町村に轉住するも本人より其の際氏子として或は座員として在籍を申出てたるものは宮年寄に於て是を認め後日宮座中に披露すへきものとする。

6、他市町村轉出者の勤番其の他は宮年寄に届出て適當なる代人を立て氏子として又座員として夫々の責務を果たすへきものとする。

但し特別の事情ある者は宮年寄に於て詮議し勤番を免除することが出来る。

7、一度脱退したる者再度加入する時は第四項冥加金を納めるものとする。

8、脱退者は一切の氏子、宮座に関する権利を放棄したるものとする。

二、宮年寄の件

1、従来の社規に係らす今後は六十才以下の高年者により三名とし順次低年者に及ぶ。

2、同一人三年制とし年番は一回限りとする。

3、今次改正に拠り八木敬次八木利一八木一馬の三名にて一ヶ年勤む。

4、勤番順位八木省司を翌年より勤番とする。

三、席次の件

1、拝殿席次は宮年寄を最上位とし以下は特に座順を規定せざるも和やかに着席のこと。

2、宮年寄を既に終了したる者も社規による隠居制は廃止する。

四、服装の件

1、公式祭儀に際しては宮年寄は因より一般参會者も和服又は洋服正装たること。

2、一般参拝の節は服装の如何を問わさるも敬神の誠を失せざる清潔なる服装であるべきこと。

以上改正條項及従来数次の改正並社規に相触れざる條目は従来の定規及慣行に拠り處置せらるべきものとする。
若し将来不審不備の点及改正の必要を認めたる時は宮年寄は区長及株總代と協議すべきものとする。

右改正は昭和三十八年一月一日より実施する。

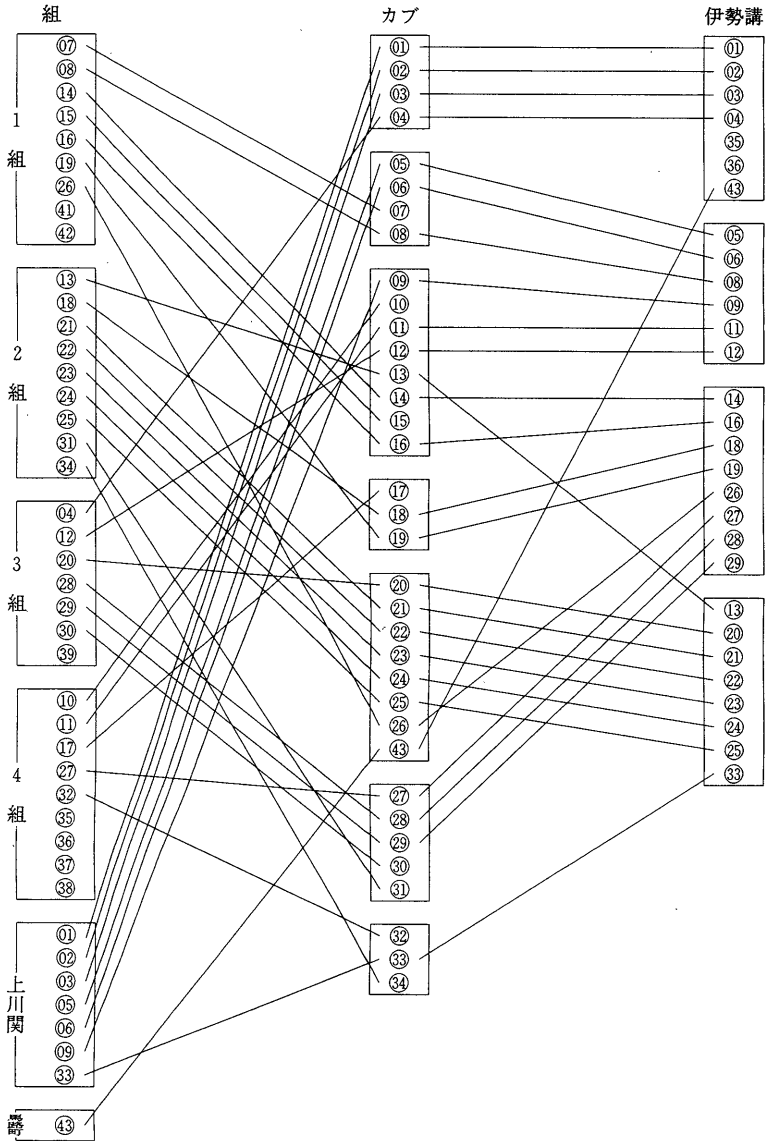
以上のように、昭和三十八年にそれまでの八木一族の宮座を村人に開放し、従来の厳しい規制がずいぶん緩和された。特に宮年寄に関して、次の年齢の者がいない場合、六〇才になるまで何年も勤めなければならなかったのが、この時に三年任期とし、必ずそこで次に交替することが定められたのである。これはすなわち、キョウノトウを勤める年齢を繰り下げたのであり、事実この改正の直後にキョウノトウを勤めた村のある古老は、数えの四一才でキョウノトウを勤め、四六才で宮年寄に加わっている。しかしそれでも宮年寄・区長・株總代の権限は依然強く、また宮

垣神社の拝殿における席次や、祭礼における服装を定めるなど、八木一族を中心とした宮座の構造はある程度は今日まで残されている。

(d) カブと伊勢講

次に川関の村組と伊勢講を中心とした組織の構造について考えてみたい。現在の川関は一組から四組および上川関の五つの組に分かれている。これがいわゆる村組に相当する組織であり、それぞれの組は七軒から九軒の家によって構成されている。組は家の立地によつて区分されたものであり、いわゆる葬式組としての機能を果たしている。一方川関には現在七つのカブが存在する。カブ内の家々は系譜関係によつて辿れるような本家・分家関係ばかりではなく、その関係がまったく不明ではあるが、古くから同じカブとしてつきあってきたという例が多い。これらはイリカブ（入り株）やヨセカブ（寄せ株）などと称して、古い時期に複数のカブが合体したり、またどのカブにも属していなかった家が既存のカブに新たに加入することが行なわれ、今日では、本家を頂点とした系譜の認識や、本・分家の社会的・経済的家格差も曖昧となっている。ただしカブ内でオモヤ・インキョの関係が明確な例もある。そのような場合は、婚礼にも招待しあったり、比較的深いつきあいをしているが、そうでない家々は、普通は葬式のみにつきあいであるという。聞き書きにおいて、「どこどここのカブは古く、由緒があるカブだ」という話が聞かれることから、かつての家筋にもとづく「カブ格」とでもいうべき格差が今日でも見え隠れしている。現在でこそカブ内部の相互扶助や紐帯は、表面的にはあまり顕著ではなくなりつつあるが、かつては婚姻や葬式をはじめ、あらゆる機会にまとまりを見せ、日々の生活の基本的な紐帯となっていた。

川勝美佐子の「八木家文書における丹波の村落生活」によれば、近世以前の川関村には郷土層としての八木氏の他に、土着百姓層としての西村氏と、小西行長の末裔とする武士層の小西氏が居住していたという。このうち西村



【図1】家と組、カブ、伊勢講対照表

拙稿「川と宮座に生きる村—川関民俗誌」（『新修亀岡市史：資料編第五巻』所収）より

姓と小西姓の者は寄せカブをして「西村講」を構成し、現在の氏神である宮垣神社を祀り、一方八木姓の者は「中村講」を構成し、薬師如来立像を先祖として祀っていたという。この両講がやがて村内の様々な権利をめぐって紛争を繰り返し、結果として八木姓の者が西村・小西姓を村から追い出すか、あるいはカブの組み替えや合併を行ない、最終的に八木姓のみが村人としての権利を手中に収め、同時に宮垣神社の氏子として、その宮座をも独占するようになったという。このような経緯を経て、川関は亀岡市域の中でもたいへんめずらしい、一村一姓の同姓村落になったと考えられる。またこのことから、今日のカブはすべて八木姓の家で構成されているが、過去を遡れば他姓の家も含まれていたのであり、複雑な寄せ株や入り株が繰り返された結果であり、その意味では現在もカブ相互の格差が消滅したとはいえないのである。

川関には、基本的にカブを単位として構成された四組の伊勢講があり、普段は別々に活動している。かつては毎月当屋を輪番で廻して集まっていたが、それでは負担が重いという理由で、正月を含めて年四回とし、さらにその後年二回となり、今日では正月のみとなっている。集まりには当屋で天照大神の掛軸を掛け、皆で飲食する。伊勢講の料理はかつてはかしわのすき焼と決まっていた。飲食の費用は、戦前まではそれぞれの伊勢講で「伊勢講田」という田を持っており、そこからの収入が大きな財源となっていたが、現在は講員の積み立てに頼っている。かつては四年に一度、それぞれの講から二名ずつの代表が集まり、伊勢神宮へ参拝に行く相談をしたという。その年の伊勢参りの世話を担当する講をオオゴヤといい、そこへ他の三つの講の代表者であるセワカタが寄って相談をする。なお古い時代には四つの伊勢講の中で序列が存在し、その序列がこの時には表面化したという。すなわち格の高い講のセワカタは、年齢に関わらず必ず上座に座り、伊勢参拝の旅の日程や様々な決定事項に関して強い発言権を持っていた。このような講ごとの序列の起源は不明だが、おそらく近世のカブの序列に基づいて構成された伊勢講の加入者の家筋に起因するのではないかと思われる。

(e) 小括

先述のように、もともと川関には八木姓の者以外に、小西姓と西村姓の者も住んでいたが、ある時期を境に八木姓の者が村を独占する形となった。現在の宮垣神社はもともと「西村講」が祀っていた神であったが、八木一族が村を独占する機会に氏神化し、同時にその祭祀組織としての宮座の権利をも手中に納めた。その後八木一族は西村氏に対して一切宮座に関知しないことを約束させ、同時に八木一族以外は宮座に加入できないとする規制を作り上げたという。この時点で宮垣神社の宮座は、八木一族の同族宮座となった。宮座では、八木一族の中でミヤノトウ、キョウノトウ、宮年寄などの役割が定められたのであろう。それが近年まで続いてきたのである。川関のミヤノトウやキョウノトウは、今日でこそ村内で平等に廻されているが、かつては八木姓の者、すなわち八木カブの者にだけ与えられた特権でもあった。

今日の川関においては、カブの紐帯はさほど強固であるとはいえない。それは、今日存在するカブが本来のカブではなく、いわば後に一族内で細分化された比較的新しいカブであるからではないのか。また川関で昭和三〇年代に宮座の解放が行われたのは、村落そのものを独占することができた八木一族にとって、もはや過去のように、頑なに氏神の祭祀権に固執する必然性を持たなかったからではないかと考えられる。

今日なお、カブを単位とする同族祭祀を頑なに保持している、たとえば亀岡市馬路町や大井町などでは、村人の氏神祭祀への結集性は弱く、依然としてカブを単位とした強固な紐帯が存続している。カブごとに特定の神を祀り、特に馬路の中沢姓のように、カブ独自の宮座の「衆座帳」を有するという事例などには、家もしくは個人が自らのアイデンティティを村落にではなく、所属するカブに求めんとする強い意識がうかがえる。⁽¹⁹⁾川関も本来はこれらの村と同質の構造を持っていたのであろうが、八木一族がいつしか他姓の者たちを排除し、また八木カブに組み入れながら、結果として八木一族が一村を独占するに至った。そうなれば、もはやかつてのカブの祭祀対象としての

仏や神は渾然一体となつて村氏神的存在と化し、特に近年には、姓やカブに固執する必然性は薄れ、その結果祭祀権が村人全体に解放されていったのではないかと思われる。しかし馬路などでは、古くから同程度の勢力を有する複数のカブが混在しながら村落運営がなされてきたのであり、そこでは現在なおカブを単位として家々が結集し、かつカブ単位と同族宮座が残されているのである。

四　むすびにかえて―丹波村落の構造把握に向けて

ミヤノトウの分布圏は思ひの外広域に及ぶ。亀岡市、船井郡の各町、さらに兵庫県丹波の篠山市へと、県境を越えて広がっている。これら広域の詳細な調査は今後の重要な課題であるが、これまでのわずかな調査資料から考えると、その地域にはすべてカブ結合が顕著に見られることは確かである。筆者は、ミヤノトウという一種の当屋祭祀は、家々の独立性が高く、各家が同等の立場において輪番で当屋を廻す、いわゆる「当屋制」とは異なり、元来カブを基盤とした特異な当屋祭祀の形態であつたのではないかと考えている。

丹波の神社祭祀においては、他の畿内周辺地域とは若干異なり、あくまでも家々の結集がカブに求められ、また祭祀集団もカブを基盤として展開してきた。カブ内では本家・分家などの格差はあるにせよ、丹波の家々はそれよりも、あくまでもその家がどのカブに属するかが重要であつた。得に南丹地域は、京都や大阪に近く、古くから人の出入りが頻繁に行われた地域であつたがゆえの結果かもしれない。また近世から明治にかけては、土地持ち百姓と水呑百姓という単純な階層差のみならず、武士階層や郷土層といった様々な階層の者たちが村内に混在しながら村落運営がなされてきたことに起因するのかもしれない。いずれにしても、丹波の人々は自分たちの家が本家筋であるか分家筋であるかという区別以上に、帰属するカブがどのカブであるかを問題にしてきた。村内であるいは周辺村落との交際の中で、自分たちの家がどのカブに所属するかが、個人の立場を最終的に決定する主要素とな

ったからであろう。その意味で丹波の村落においては、「家格」よりも「カブ格」が重要だったのである。

具体例を示そう。たとえば亀岡市馬路町では、人見・中川・河原・中沢・畑の五姓の家々が全戸数の大半を占め、そのうち人見と中川はあわせて「両描」といわれ、いわゆる近世の郷土層であるといわれている。また河原は百姓身分、中沢は開発根元百姓の家筋であるといいい、これらのカブでは畑姓を除いて、今日でも独自の祭祀対象を祀る、いわゆる同族祭祀を行っている⁽¹⁴⁾。また同市大井町並河では、宇多源氏の末裔といわれる三宅カブで天皇講を作り、天皇神社を祀っている。この三宅カブには川勝や田中という異姓の家も含まれている。このような現象について長谷川嘉和も「入株や異姓を加えてもなお「株」の存続をはかり繁栄を願うのは、たんに経済的な共益だけでなく、それ以上の有形無形のもの期待されているものとみられる」と分析しているように、今日なお強固な紐帯を保持するカブも、系譜や血筋、家筋を超越した所で結合をはかっているのである⁽¹⁵⁾。今日でこそこのようなカブ結合は希薄になりつつあるが、かつてはもっと多くの村落で同様のカブ結合が存在し、同族的な祭祀が行われていたことは想像に難くない。本論で取り上げた川関も例外ではない。ただ川関では、早い時期に八木一族が他姓の者たちを排除あるいは同化・吸収することに成功し、いわゆる同姓村落となつたがゆえに、馬路のような同族祭祀が表面化せず、もとの同族祭祀の対象を村氏神として祀り、その祭祀権を長い間一族の者だけが独占するという形態をとってきたのである。今日ではその祭祀権も平等に解放されたように見える。しかし実態は、村人がすべて八木一族に吸収・合併された結果を示しているにすぎず、観念的には、まだ同族祭祀は続いていると解釈することもできる。これは決して神社祭祀の権限をすべて平等に解放した、いわゆる「村座」とはいえない。

一方日吉町天若地区・中地区の村落では、亀岡市域と比べて早くにカブ結合が弛緩し、カブを中心とした本来の家々の紐帯は崩壊の一途を辿ってきた。だからこそミヤノトウも早い時期に村落祭祀の中に解放されていったのであろう。しかしほとんどの村落で、ミヤノトウを勤める権利を有するのは、特定カブの、しかも跡取りとしての長

男に限定されており、他所から養子に來た者にその權利が与えられなかったことは、ミヤノトウが簡単に解放されるべきものでなかったことを示していると思われる。

亀岡市馬路町などの例外を除いて、多くの丹波村落では、時代とともにカブ結合の必然性が薄れ、村内において家々が所屬するカブゆえの特權を主張することが困難になつてきた。そのような中で、元來のカブを基礎とした家々の格を主張するための、別のシステムが必要となつた。それが伊勢講であつたのではない。丹波の村落で今日のような伊勢講が組織されたのは、近世中期から後期にかけての時期と考えられ、中には明治以降になつて新たに講が作られたという例もある。これらの伊勢講は、本來の伊勢信仰に基づく代參講としての機能以外に、かつてのカブ格をスライドさせた社会集團としての機能を有するようになり、村内に複数の伊勢講が存在するような場合、いわば「伊勢講格」とも稱すべき格差を生ずるに至つたものと考えられる。日吉町のような、カブ結合が比較的早くに弛緩していった地域においても、伊勢講に加入することが一人前の村人としての象徴のように語られるのも、またかつてのカブ格とカブ結合の名残がそれぞれの伊勢講の構成員に反映されていることも、家々のアイデンティティーの象徴が、カブから伊勢講に移行したことを物語っているのではないだろうか。川関の古老たちには、複数の伊勢講の格差が嚴然と存在した当時の記憶が今も残っている。丹波地域において、数ある講集團の中で伊勢講が特に重要な意味を持つのは、こうした家々の結合の構造的變化の結果ではないかと考えられる。

丹波の村落は実に複雑でつかみ所がない。また非常に閉鎖性が強い地域も存在する。それがゆえに、これまで調査研究があまりなされなかつたのであろう。近年の研究動向を見ても、近江・山城・大和、あるいは泉州地域をフィールドとした調査研究は多いが、丹波地域の研究は驚くほどに少ない。しかし畿内とその周辺地域の村落構造について言及し、普遍的解釈を試みるためには、丹波地域の村落構造を明らかにすることが必要條件である。その意味で、丹波地域の研究は、現代民俗学の重要課題であるといえよう。

本小論で、特に終章で述べた筆者の見解は、ほとんどが現段階では十分な根拠を示すことができない、まさしく仮説である。ただいえることは、これまで京都周辺の様々な地域の調査を行ってきた筆者の、長年暖めてきた問題意識から滴り落ちた「発想」であり、決して単なる思いつきでないことだけは強調しておこう。今後は、本小論で明らかとなった事実に基づきながら、京都府・兵庫県岡丹波地域を視野に入れながら、少しずつでも、当該地域の村落構造の解明に向けて、緻密な調査を繰り返しながら、事例研究を積み重ねてゆきたいと考えている。

注

- (1) ミヤノトウ、キョウノトウの「トウ」の漢字に関して、たとえば亀岡市川関の宮垣神社関連の近世文書には、すべて「宮の党」・「経の党」のように「党」の文字が使われている。しかし本来の語義から考えると、当役を意味することから「当」あるいは「頭」の漢字を用いることが妥当であると思われる。筆者は、現在の事象を基にして過去の歴史世界にもアプローチするような民俗学的研究においては、「当屋制」などを含めて、すべて「当」の文字を宛てるのが適切であると考えているため、ここではあえて「宮の当」・「経の当」の漢字を用いた。
- (2) 長谷川嘉和・横出洋二他「まつりの伝承」(『新修亀岡市史・資料編第四巻』所収)、亀岡市役所、一九九六年
- (3) 竹田聰洲「村落同族祭祀の研究」一九七七年、吉川弘文館(『竹田聰洲著作集第五巻』所収、国書刊行会、一九九六年)
- (4) 八木 透「社会生活と村落組織」(日吉ダム水没地区文化財等調査委員会編『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』所収)日吉町役場、一九八八年
- (5) 青盛 透「祭祀」(『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』所収)詳細は前掲
- (6) 矢部朴斉「桑下漫録」後編(文化5年)「川関村」の項
- (7) 亀岡市史編纂委員会編『亀岡市史』上巻、一九六〇年、亀岡市役所
- (8) 八木 透「川と宮座に生きた村―川関民俗誌―」(『新修亀岡市史・資料編第五巻』所収)、亀岡市役所、一九九八年
- (9) 亀岡市史編纂委員会編『新修亀岡市史・資料編第四巻』、詳細は前掲
- (10) 「規録帳」は宮垣神社宮年寄文書。複写は亀岡市史編纂室にある。
- (11) 「神社記録」は宮垣神社宮年寄文書。複写は亀岡市史編纂室にある。

(12) 川勝美佐子「八木家文書における丹波の村落生活―主に幕末から明治末期にかけて―」(『京都民俗』第2号・第3号合併号、京都市俗学談話会 一九八五年)

(13) 「衆座帳」とは、馬路町の中沢・人見・中川の各カブの構成員の名が年齢順に記された帳面である。たとえば中沢カブでは、毎年正月九日にキョウノトウという同族祭祀が行われているが、その後の直会でその年に二〇歳になった若者たちの名が誕生日の順に衆座帳に記され、その記載順にいずれは「六人衆」といわれる長老衆に加

入してゆくことになっている。

(14) 馬路町の同族祭祀に関しては、竹田聰洲『村落同族祭祀の研究』(詳細は前掲)、あるいは長谷川嘉和・横出洋二他「まつりの伝承」(『新修亀岡市史・資料編第四巻』所収、亀岡市役所、一九九六年)などを参照のこと。

(15) 長谷川嘉和・横出洋二他「まつりの伝承」(詳細は前掲)

(16) 大井町並河の三宅カブの同族祭祀に関しては、長谷川嘉和・横出洋二他「まつりの伝承」(詳細は前掲)、あるいは民俗祭事調査会編『民俗祭事の伝統』(一九九〇年、角川書店)を参照のこと。

本小論執筆にあたっては、日吉町の旧天若・中地区の方々、および亀岡市川関の方々には、筆者の調査に際して絶大なるご協力をいただいた。また亀岡市史編纂室学芸員の鵜飼均氏・松井めぐみ氏、日吉町教育委員会学芸員の向田明弘氏を中心として、多くの方々から貴重な情報や資料を提供いただいた。さらに佛教大学大学院の大野啓氏と西本幸嗣氏には、史料の翻刻や調査に関してお世話になった。ここに記して心から感謝申し上げたいと思う。

なお、本小論執筆のための補充調査と資料収集のために、一九九八年度に佛教大学から受けた特別研究助成金の一部を使用させていただいたことを付記しておく。